

深夜のタクシーで終電
を逃した僕を拾った運
転手が元同級生で狭い
後部座席で目的地に着
いても降りしてもらえ
ないカントボーイ

っ……あ……。

耳の奥で心臓の音がうるさい。

酔いが回った頭の中で世界がぐらぐら揺れている。頬に張り付いた革張りシートの冷たさだけが、意識をこちら側に繋ぎ止めていた。

深夜のタクシー。

いつ乗ったのかも覚えていない。会社の飲み会、三次会まで付き合わされた。終電は当然逃した。駅前のロータリーでふらつく足で手を挙げて、滑り込んだ後部座席で——そのまま意識が落ちたらしい。

揺れが止まった。

エンジンの低い振動だけが、閉ざされた車内に残っている。暖房の温もりと、微かに古びた芳香剤の匂い。

「——お客さん」

声。

低くて、少しだけ掠れた声だった。

その声を聞いた瞬間、鳩尾のあたりがぎゅっと縮んだ。知らない声のはずなのに、身体のコが反応している。鼓膜を通過した音の振動が背骨を伝い、下腹部の——自分でも触れたことのない場所が、かすかに脈打った。

「着きましたよ。——柊、蒼真」

名前。

酔いが一瞬で醒めた。

身体を起こす。バックミラー越しに、運転手の目と合った。切れ長の目。暗い車内で、街灯のオレンジ色の光がその瞳の輪郭だけを浮かび上がらせている。琥珀色の——深い色。

「……なんで、俺の名前」

「覚えてねえか」

運転手が笑った。

営業スマイルじゃない。口の端だけが持ち上がる、苦いかたちの笑い方。バックミラー越しのその表情を見た瞬間、柊蒼真の背筋に冷たいものが走った。

「誰……」

「鷹取。鷹取凜太郎。——同じクラスだっただろ、高一の時」

鷹取。

その名前には、何の引っかかりもなかった。高校の記憶は——意図的に蓋をしている。あの時代のことは思い出したくない。思い出すと身体が反応する。心臓が速くなり、下腹部がじわりと疼く。だから三年分まるごと封印した。

「……すみません、覚えてなくて。料金いくらですか」

財布を探る。ズボンの内ポケットに手を突っ込む。早くここから出たい。声が微かに震えているのが自分でも分かった。

ドアノブに手をかけた。

——開かない。

がちや、がちや。

「開けてください」

「まだ降りるな」

鷹取の声が変わった。

さっきまでの掠れた柔らかさが消えて、低く、重い。運転席のドアロックスイッチ——全座席を一括で制御するタイプだ。運転手が解除しない限り、後部座席からは開けられない。

密室。

逃げ場がない。

「なに……何する気ですか」

「何もしねえよ。——話がしたいだけだ」

バックミラー越しに、鷹取の目がこちらを見ている。街灯が流れるたびに、その瞳に光が走る。飢えた目をしている、と思った。「話がしたい」だけの目じゃない。もっと暗くて、もっと深くて——もっと切実な光が、琥珀色の底に揺れている。

「覚えてないっていうのは……本当に覚えてないのか。それとも、覚えてたくないのか」

心臓が跳ねた。

——反芻が始まる。

高校。高校時代。体育の授業。足を挫いた。保健室まで、誰かに肩を貸してもらった。教室の隅で一人で弁当を食べて

いたのに、その誰かだけが駆けてきてくれた。華奢な自分の身体を支えてくれた、大きな手。あの時の――。

「……あんた、が」

「やっと思い出したか」

鷹取がエンジンを切った。

車内が静寂に沈む。深夜の住宅街。外灯の淡い光だけが、薄く窓ガラスを染めている。暖房が止まり、閉じ込められた空気がゆっくりと冷え始める。

静かすぎる。自分の呼吸の音が異様に大きく聞こえた。鷹取の呼吸も。二つのリズムが微妙にずれていて、そのずれが神経を逆撫でする。

「保健室まで肩貸しただけだけだな。お前、めちゃくちゃ怯えてた。身体に触れただけで、びくって」

「……」

「あの時から――ずっと気になってた。お前のこと」

ずっと。

10年。

鷹取凜太郎は10年間、柊蒼真という人間を覚えていた。名前も、教室の席順も、一人で弁当を食べていた横顔も。

自分は――鷹取の名前すら忘れていた。いや、忘れたのではなく、あの時代ごと消去しようとしていた。

「なんで」

「なんでって——」

「なんで、覚えてるんですか。あんな、なんでもないこと」

「なんでもなくなかったんだよ。俺には」

鷹取の声が震えた。感情が漏れている。営業スマイルの裏に押し込めていたものが、薄い膜を破って滲み出してくる。バックミラーの中の鷹取の目が、痛いほどまっすぐにこちらを見ていた。

「お前が俺を覚えてないのは……正直、きつかった。でも——覚えてないなら、最初からやり直せるかもしれないって。そう思った」

「やり直す……？」

「お前に会いたかった」

その一言が、静まり返った車内に落ちた。

柵の耳が、その残響を何度も再生する。会いたかった。会いたかった。会いたかった。反芻する思考が止まらない。10年間、自分のことを覚えていて、会いたいと思い続けた人間がいた。

なのに自分は——その人間の名前すら覚えていなかった。

沈黙が降りた。

深夜のタクシーの中。エンジンが止まった車内で、二人の呼吸だけが冷えていく空気を揺らしている。窓ガラスがわずかに曇り始めていた。二人分の体温と呼気で。

「……あの時」

柊の唇が動いた。自分でも意図しない言葉が、声にならない声で漏れた。

「保健室まで、肩貸してくれた時」

「ああ」

「なんで——俺の身体に、気づかなかったんだよ」

鷹取の呼吸が止まった。

バックミラーの中で、二人の目が合う。鷹取の瞳が揺れている。唇が微かに開いて、数秒の沈黙のあと——。

「気づいてた」

三文字。

たった三文字で、柊の世界が傾いた。

「気づいて……」

「肩に腕を回した時に、分かった。骨格が——男のそれと、少し違った。鎖骨の角度も、肋骨の厚みも。サポーターの感触もあった。でも」

「でも……？」

「お前が必死に隠してたから。——言わなかった。誰にも」
知っていた。

高校一年の時点で、鷹取は知っていた。柊蒼真がカントボーイであることを。男として生きている身体の下に膺を持っているということを。

知っていて——黙っていた。三年間。そしてその後の七年間も。

それが優しさだったのか。

それとも——執着の始まりだったのか。

「……降ろしてください」

「柊」

「降ろせて言ってんだろ！」

声が裏返った。動揺で敬語が剥がれている。涙が出そうなのを必死に堪えている。10年間封印してきた身体のコールド。それを知っている人間が、今、すぐ目の前にいる。バックミラー越しでなく、たった一枚の座席の背もたれを挟んだだけの距離に。

逃げたい。逃げなければ。

ドアをがちゃがちゃと引く。開かない。両手で引く。開かない。爪が割れそうなほど力を込めても、ロックは解除されない。

その時——後部座席のドアが、内側からではなく外側から開いた。

鷹取が運転席から降りて、車体の後ろを回り込んできたのだ。深夜の冷たい空気が車内に流れ込む。二月の夜気。吐く息が白い。

柊が飛び出そうとした瞬間、鷹取の手が肩を掴んだ。

「待て」

「離せ……っ」

「逃がさない。——10年待ったんだ」

鷹取が後部座席に乗り込んできた。大きな身体がシートに沈む。ドアが閉まる。ロックの音。カチャリ。

狭い。

男二人が後部座席にいるには、あまりにも狭い。鷹取の太腿が柊の太腿に触れている。布越しの体温。鷹取の肩幅が広くて、二人分の身体が座席に収まりきらない。柊の肩がドア側の窓ガラスに押し付けられる。

そして——匂い。

鷹取のシャツの襟元から、匂いが近い。汗と、少しだけ煙草と、皮革。タクシーのハンドルを握り続けた手の匂い。そこに混じる、微かな——木の匂い。

息が止まった。

知っている。この匂いを。

高校の体育館倉庫。古い木と埃の匂い。あの匂いの中に混じっていた、人間の体温の匂い。保健室まで肩を貸してくれた時に、すぐ隣にあった鷹取の匂い。

10年間封印していた記憶が、匂いをトリガーにして一気にフラッシュバックする。

あの日。肩を貸されて、保健室のベッドに座らされた。白いシーツの匂い。消毒液の匂い。鷹取が救急箱から絆創膏を探してくれている間、自分は心臓が壊れそうだった。身体に触れられた。骨格の違いを気づかれたかもしれない。怖い。怖い。怖い。

——でも。

鷹取の匂いだけは、安心した。

理由なんか分からない。あの時の自分に理由を問う余裕はなかった。ただ、鷹取の体温と匂いが近くにあるだけで、恐怖の底に一本だけ糸が垂らされたような——そんな安堵があった。

「……覚えてる」

声が漏れた。

柊の意志とは無関係に、口が動いていた。匂いに釣られて、封印の蓋が勝手に開いていく。

「覚えてる……あんたの、匂い」

鷹取の目が見開かれた。

バックミラー越しではない。初めて、直接目が合った。至近距離で見る鷹取の瞳は暗い茶色で、街灯のオレンジの光を受けて深い琥珀色に見えた。睫毛が長い。頬骨の影が濃い。10年前はただの男子高校生だったはずなのに、今の鷹取の顔は——大人の男の顔をしていた。

「覚えてたのか」

「覚えてたくなかった。——あの時の自分ごと、全部封印したかった。あんたのことを覚えていたら、あの時代を消去できなくなるから」

「……蒼真」

下の名前と呼ばれた。

その声が——低くて、少しだけ震えていて、10年分の感情が滲み出すような甘い響きを帯びていて——柊の聴覚が、全てを増幅する。

鼓膜が痺れる。声が、耳から入って、背骨を伝って、下腹部まで降りてくる。聴覚過敏の身体が鷹取の声に共鳴して、自分の身体が一番触れたくない場所が——脈打った。じわりと。確かに。

「……っ」

「触っていいか」

鷹取の声が耳元にある。いつの間にか距離がなくなっている。鷹取の吐息が柊の耳殻に触れた。温かい息。

柊は答えなかった。答えを持っていなかった。嫌だと言いたいの、身体が逃げない。鷹取の匂いを嗅ぐたびに、封印が溶けていく。

鷹取の手が、柊の頬に触れた。大きな手。温かい手のひら。あの日と同じ——保健室まで自分の身体を支えてくれた、あの手。

「泣いてるぞ」

「泣いてない……」

「嘘だ。ここ、濡れてる」

親指で涙を拭われた。泣いていた。いつから。匂いを嗅いだ瞬間からか。名前を呼ばれた瞬間からか。

鷹取の手が頬から首筋に降りる。ネクタイの結び目に触れる。指が結び目にかかり——引く。

衣擦れの音が車内に響いた。絹とポリエステル混紡が擦れる、しゅるりという音。柊の聴覚がそれを正確に拾い上げる。

ネクタイが解かれる。

「……やめろ」

「やめない」

鷹取の指がシャツの第一ボタンに触れた。外す。小さな音。プラスチックのボタンが綿の穴を通過する、かちりとも言えないほど微かな音。

第二ボタン。